

幼児の愛着行動と母親の養育スタイルの関連性

○吉原可恋・金平希

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部心理学科)

目的

本研究では、保育園に通う3歳児から6歳児の母親を対象に、子どもの愛着行動と母親の養育スタイルの関連性について明らかにすることを目的とした。その際、①子どもの性別によって、子どもの愛着行動や母親の養育スタイルに違いがある、②子どもの愛着行動と母親の養育スタイルには関連がある、といった2つの仮説を立てた。

方法

倫理的配慮 本研究は、所属学科の「研究倫理の自己評価」を提出し、承認を得て実施した。

調査対象者および調査期間 A市の保育園に通う3歳児から6歳児の母親21名(平均年齢35.62歳, $SD=4.13$)を対象とした。子どもの内訳は、男児12名(平均年齢4.25歳, $SD=0.92$)、女児9名(平均年齢3.70歳, $SD=1.42$)であった。2021年9月にWEBアンケート調査を実施した。

調査内容 ①フェイスシート②子どもの愛着行動③母親の養育スタイルについて調査をした。①は、保護者の年齢、子どもとの関係性、子どもの年齢、性別、出生順位について回答を求めた。②は、山口他(2010)が作成した愛着行動尺度26項目を用いた。③は、松岡他(2011)が作成した養育スタイル尺度27項目を用いた。

結果

まず、子どもの性別によって、子どもの愛着行動に違いがあるかについて検討するため、対応のないt検定を行った。その結果、愛着行動の「安全基地」のみで有意な傾向が見られた($t(14.92)=1.78, p<.10$)。同様に、母親の養育スタイルの違いについて対応のないt検定を行った結果、養育スタイルの全てにおいて有意な差は見られなかった。さらに、子どもの愛着行動と母親の養育スタイルの関連性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した(Table1)。その結果、愛着行動の「回避」は養育スタイルの「相談・つきそい」と有意な負の相関を示し($r(9)=-.46, p<.05$)、「育てにくさ」「対応の難しさ」と有意な正の相関を示した

($r(9)=.44, p<.05$; $r(9)=.44, p<.05$)。また、愛着行動の「困難なやりとり」は養育スタイルの「育てにくさ」と有意な正の相関を示した($r(19)=.59, p<.01$)。

Table 1 愛着行動と養育スタイルの相関

	養育スタイル				
	肯定的働きかけ	相談・つきそい	叱責	育てにくさ	対応の難しさ
安全基地	-.12	-.06	.14	.09	.32
回避	.06	-.46*	.29	.44*	.44*
愛着行動 快適	.39*	-.21	-.19	-.21	-.07
肯定的やりとり	.02	-.31	-.28	-.34	-.26
困難なやりとり	.04	-.13	.22	.59**	.18

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

考察

本研究の結果、仮説①については、愛着行動の「安全基地」のみ性別で違いがあり、男子は女子と比較して、母親を安全基地とする愛着行動が多い傾向が示された。このことから、男子は女子よりも母親に身体接触を求め、母親と安定した関係性を構築しようとする事が明らかとなった。

次に、仮説②については、子どもの「回避」といった愛着行動は、母親の「相談・つきそい」「育てにくさ」「対応の難しさ」の養育スタイルと関連していた。また、子どもの「困難なやりとり」といった愛着行動は、母親の「育てにくさ」の養育スタイルと関連していた。このように、子どものネガティブな愛着行動について、母親が自分のことを回避している、やりとりに困難さがあると感じている場合、子どもを育てにくい、対応が難しいと感じていることが明らかとなった。一方、子どもの「安全基地」「肯定的やりとり」といったポジティブな愛着行動は、母親の「肯定的働きかけ」といった養育スタイルとの間に関連がみられなかった。先行研究では関連性が指摘されていることから、良好な愛着行動と養育スタイルの関連性についても今後着目することが重要であると思われる。最後に、本研究では母親のみの視点から子どもの愛着行動と母親の養育スタイルの関連性を明らかにした。今後は、子どもの身体的接触や認知的な側面にも着目し、実際の母子相互作用場面の観察を含めた研究を行うことが必要であろう。